



2

【ひろばの風】

シェナの聖カタリナの靈性と、
その指し示すところ
聖カタリナ大学 教授・副学長
谷 隆一郎



3

【Campus News】

四国アイランドリーグPlus公式戦で本学学生が始球式や試合運営にチャレンジ
北条鹿島まつりに本学学生が参加
「青空の下みんなであそぼう」を開催
本学の留学生が国際親善交流会に参加
春季リーグ戦優勝、全日本選手権出場

4

【Campus News】

「地域交流イベント」へ本学留学生が参加
健康スポーツ学科4年生が病院で運動指導
平成29年度ボランティアーウィークの一般公開について
ボランティアセンターが「平成29年度優良青少年団体」として知事表彰
松山まつり「野球拳おどり」で優勝・チャリティゲーム大会を開催
ほか



5

【ESSAY】

「日常を見る目」
人間健康福祉学部
大久保 元正



カタリナ ひろば

Vol.30 No.1
2017.11

聖カタリナ大学
聖カタリナ大学短期大学部
www.catherine.ac.jp



6

【ゼミナールインタビュー】

人間健康福祉学部
青木 謙介ゼミ



7

【ようこそ就職課へ】

就職課長 鈴木 勝



8

【クラブ紹介】

軟式野球部
部長 健康スポーツ学科3年
曾我 優貴



8

【教員著書紹介】

【聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部研究叢書4】
癒し 地域包括ケア研究
聖カタリナ大学30周年・聖カタリナ大学短期大学部50周年
開学記念特集号
恒吉 和徳 (聖カタリナ大学教授) 他13名
: 創風社出版 2017年



シェナの聖カタリナの靈性と、 その指し示すところ

聖カタリナ大学 教授・副学長 谷 隆一郎



悪霊に取りつかれた人を救うシェナのカタリナ
シェナ、聖ドミニコ教会、16世紀

イタリアの中部、トスカナ地方の古都シェナは、わたしにとっても懐かしい町である。もう30年も前のことになるが、イタリアに1年間ほど留学する機会があり、そのうち3ヵ月余りシェナの聖ドミニコ修道院に滞在させてもらったことがある。それは、名目上は客員研究員としてであるが、実際のところ気楽な居候としてであった。その経験は、わたしの人生にとって小さからぬ意味を有するものとなり、折にふれてその都度の今、ふと懐かしく甦ってくるのである。

そこで今回、「カタリナひろば」という冊子に一文を記すよう求められたことを機に、古都シェナについて、また聖カタリナについて少し思いを綴って責めを寒ぐことにしたい。



シェナ、聖ドミニコ教会、16世紀

シェナの聖カタリナの名は、わたしが理系から転向して文学部の大学院に入った頃から、ある種の憧れと畏敬の対象であった。わたしは主として教父・中世の哲学・神学に長らく学んできているが、留学の話が現実味を帯びてきたとき、滞在先の少なくとも1つはシェナでなければという気持ちがおのずと浮かんだ。それは、九州大学(文学部)に赴任して6年ほど経ち、ダンテ『神曲』の言う人生の半ばを少し後にしたときのことである。「学問などはどこにいてもできる。できればシェナのカタリナのような聖人を育んだ風土に身を置いて、自分の歩みを見つめ直したい」という思いであった。なお、留学に際しては、当時京都のトマス学院におられた旧知の故・竹島幸一神父さん(前学長)や、大学院以来の畏友宮本久雄さん(やはりドミニコ会神父)のお力添えを賜った。

さて、シェナの修道院では(わたしは神父ではなく、一カトリックに過ぎないが)分け隔てなく、気ままにかつやや神妙に生活させてもらった。祈りと学の一体化した生活を十分に享受したのだ。そしてそれは、学究としての歩みの1つの素地となり、新たな探究を促すものとなったのである。

ところで、シェナのカタリナはたとえばトマス・アクィナス(中世スコラ学の代表者の1人)の終わったところから出発している感がある。というのも、カタリナは幼い頃から、「神の花嫁」に迎えられるかのような神秘的経験を有し、いわば神の靈(ないし愛)に導かれる稀有な生を送ったからである。その生きた14世紀は、西欧キリスト教世界にあってローマとアヴィ

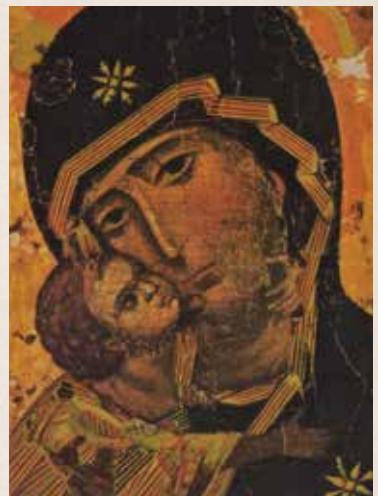
ニヨンという2つの場所に教皇庁が分かれ、政治的にも激動の時代であった。そんな中、ドミニコ会の一介の修道女としてカタリナは、1つの教会(神性の靈的・全一的交わり)を実現させるために、教皇や王侯貴族たちにも働きかけたのだ。他方、ペスト(黒死病)が猛威を振るう状況において、病んだ人、貧しい人のために文字通り自らの全体を捧げ、33年の短い生涯を送った。それはまさに、魂の根底において神の働き(聖靈)に促されたような生であったと考えられよう。

ちなみに、シェナのカタリナはアッシジのフランチェスコとともにイタリアの守護聖人とされる。また、アビラのテレジアと並んで女性として数少ない「教会博士」の称号を受けられている。そのただ1冊の著作『対話～神と魂との』は、「人間における神のわざ・働き」を透徹した言葉で観想し、ひいては「人間の真実」をゆたかに語り出している。

では、カタリナという人は一体何を体现し、指し示しているのであろうか。それは恐らく、仮に一言で言うなら、すべて人間が「心碎かれた謙遜のうちに」神(無限なる存在)を、あるいは神の働きを受容しうるということであろう。カタリナにおいては、「神の働き・靈を能う限り受容し宿した姿」が稀有な仕方で現出していたと思われる。そして、彼我の内的境位は余りに隔たっているとはいえ、われわれはすべて、それぞれの分と役割に応じてそうした姿に成りゆくべく開かれているであろう。

もとよりわれわれは、世のさまざまな事物への、そしてとりわけ自己への執着を多少とも抱え、心の内奥での神の呼びかけに対して己れを閉ざしてしまうことが多いかもしれない。しかし、聖カタリナは(使徒たち以来多くの師父たちとともに)、人として成りゆくべき本来の姿を身をもって体现し、等しくわれわれを同じ姿、同じ道行きへと招いてくれているであろう。

してみれば、カタリナの名は—いわば我が国における空海や道元といった先哲の名と根本では呼応しているであろうが—、まさに尊く栄えあるものである。そして、改めて思うに、聖カタリナの精神、その祈りと靈性の働きは、聖カタリナの名を冠した大学にそれぞれの縁あって集うすべての人々に、かつても今もいつも現前し、恐らくは魂の根底においてわれわれすべてを支え、何らか導いてくれているであろう。



ウラジミールの聖母
モスクワ、トレチャコフ美術館、12世紀

四国アイランドリーグPlus公式戦で 本学学生が始球式や試合運営にチャレンジ

4月28日(金)、坊っちゃんスタジアムで開催された四国アイランドリーグPlus2017公式戦(愛媛MP vs 高知FD)において、健康スポーツ学科の宮武ゼミ・芳地ゼミ合同の学外研修が実施されました。学外研修では、学生が始球式や5回裏終了後の場内パフォーマンスにもチャレンジするなど、試合運営に関わる様々な役割を担当させていただきました。

＜主な担当(体験)業務＞

- ①始球式
- ②スタジアムの入場口で入場整理・ジェット風船配布
- ③ボールボーイ
- ④場内パフォーマンス(5回裏終了時)
「坊っちゃんスタジアムで夢をカタリナコーナー！！」
- ⑤ゴミの回収・分別、片づけ(スポンサー幕など)



北条鹿島まつりに本学学生が参加

5月3日(水)、北条鹿島まつりにボランティアセンターの26名の学生と台湾の留学生4名が参加しました。土手内地区の子どもだんじりをかき、だんじり練りの体験をさせていただきました。

翌日4日(木)は、大しめ縄張り替え体験に韓国と台湾の留学生5名が参加しました。実際に大しめ縄作りに参加し、北条地区的貴重な文化体験をさせていただきました。

また、今年度より北条地区まちづくり協議会と本学ボランティアセンターが協同で活動している「カタリナ散歩道(twitter)」でも、今回の地域の方々との交流の様子を発信しています。
(カタリナ散歩道 <https://twitter.com/Catharine0325>)



「青空の下みんなであそぼう」を開催

5月7日(日)、「青空の下みんなであそぼう(主催:松山市社会福祉事業団・松山市中央児童センター)」が学内で開催されました。このイベントは幼児とその家族を対象とした恒例イベントです。

当時は、お天気に恵まれ、外で気持ち良く遊んだり、室内で制作を楽しんでいただきました。毎回このイベントを楽しみにして下さっている方もおり、みなさん「楽しかった！」と笑顔で帰られました。

また、保育学科2年生も各イベントの運営を担当し、日頃の学習成果を地域の方々に披露する良い機会となりました。



本学の留学生が国際親善交流会に参加



5月20日(土)、韓国の留学生3名が、国際ソロプロチミスト松山からご招待いただき、松山全日空ホテルで開催された「第38回国際親善交流会」に参加しました。

琴の演奏を聞いた後、留学生たちは先生に童謡「さくらさくら」の弾き方を習いました。

また、お昼には豪華なランチをいただき、最後に参加者全員で「この街で」という歌を手話を交えながら歌い、閉会となりました。

留学生たちは日本の伝統文化や多くの方々との交流を通して、非常に楽しい一時を過ごしました。

春季リーグ戦優勝、全日本選手権出場

6月3日(土)、今治市営球場で春季リーグ戦の決勝戦(vs徳島大学)がおこなわれました。徳島大学との決勝戦に3対2で勝利し、春季リーグ戦の優勝と第40回全日本大学軟式野球選手権大会への出場権を勝ち取りました。

「地域交流イベント」へ本学留学生が参加

留学生と北条地区まちづくり協議会との地域交流イベントに韓国と台湾の留学生が参加し、地元の方々との交流を深めました。

開催日	内 容
平成29年6月3日(土)	松山市北条にある風早山本農園さんで行われた『トマト収穫体験』に、台湾の留学生18名が参加しました。ハウス内に実ったトマトを自分たちで収穫したり、採れたての新鮮なトマトを味わうなど貴重な農業体験をさせていただきました。
平成29年6月17日(土)	松山市北条にある北条公民館で行われた『コーヒー教室』に、台湾の留学生8名と韓国留学生2名が参加しました。留学生同士や地域住民の方と交流を深め、和気藹々とコーヒー作りを楽しみ、自分たちで豆を煎るところから作ったコーヒーを味わうなど、貴重な体験をさせていただきました。

健康スポーツ学科4年生が病院で運動指導

社会医療法人 真泉会 今治第一病院と提携し、健康運動実践指導者の資格を取得した健康スポーツ学科4年生が運動教室を運営しました(平成29年6月9日～8月25日)。

授業で学んだ知識、指導方法を活かして、参加者にリズム体操、ストレッチング、筋力トレーニングなどの運動指導を行いました。参加者からは学生と交流をもつことにより、若返るといった感想を頂きました。



平成29年度 ボランティアーウィークの一般公開について



7月15日(土)ボランティアーウィーク一般公開が大盛況のうちに終了しました。

今年はボランティアセンターがまちづくり応援隊として「カタリナ散歩道」を実施したことから、「地元北条の小中高生たちも北条の魅力や宝を大講義室で発表していただこう」という企画を実施しました。小中高生たちはこの地で生まれ育てられていることに誇りを持って、北条の魅力をたくさん紹介してくださいました。

また、恒例の福祉施設の皆さんによる作品販売も行われ、とても賑やかなひとときを一緒に過ごすことができました。

ボランティアサークルの紹介やステージサークルの発表、エヌスコや聖マルチンの家(特別養護老人ホーム)の方々の作品の展示、そしてカタリナ散歩道の写真の初展示、パイプオルガン演奏も行われました。

大勢のお客様をお迎えし、募金額は短冊募金¥59,876、フリーマーケットバザー収益¥54,384となりました。短冊募金は九州北部豪雨災害支援へ、フリーマーケットバザー収益はまごころ銀行(松山市社会福祉協議会)に寄附をしました。

ボランティアセンターが 「平成29年度優良青少年団体」として知事表彰



ボランティアセンターが、7月28日(金)に愛媛県生涯学習センターで開催された青少年の非行・被害防止県民大会において「平成29年度優良青少年団体」として愛媛県知事から表彰されました。

ボランティア活動に向けて、学生たちは『若い力で地域、愛媛を元気にしたい』、『いろいろな活動にチャレンジして自分を高めたい』そのような思いで、様々な地域の活動に取り組もうと意気込んでおります。

松山まつり「野球拳おどり」で優勝・ チャリティゲーム大会を開催

8月12日(土)の松山まつり「野球拳おどり～団体連の部～」で、聖カタリナ学園連が優勝を果たしました。

当日は、聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部の学生・聖カタリナ学園高等学校的生徒の踊りに合わせて教職員が笑顔で楽しく、元気に、はつらつと踊りきり、練習の成果を発揮することができました。汗びっしょりの学生達の顔には、みんなで一体となってやりきった充実感がありました。皆様のご声援、ありがとうございました。

また、松山まつりをより楽しんでいただくため、8月11日(金)・12日(土)・13日(日)には、聖カタリナ学園(聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部・聖カタリナ学園高等学校)としてチャリティゲーム大会を開催し、親子連れの方を始め多くの方に楽しんでいただきました。

ご来場いただき募金にご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

当日、いただいた募金は、松山市社会福祉協議会のまごころ銀行に全額(¥148,010)を寄附させていただきました。



第40回全日本大学軟式野球選手権大会の結果

第40回全日本大学軟式野球選手権大会が長野県で開催され、本学軟式野球部(四国代表)は8月21日(月)に日本体育大学(東都代表)との初戦を戦いました。

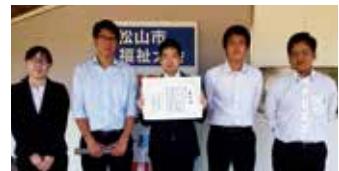
初の全日本選手権大会出場を記念し、新ユニフォームで臨んだ本学軟式野球部は、2回裏に先取点となる1点を先制しましたが中盤に逆転を許し、日本体育大学に6-1で敗れ、悔しくも初戦敗退となりました。たくさんのご支援、ご声援ありがとうございました。

ボランティアセンターが 松山市社会福祉協議会会長より表彰

9月8日(金)、松山市民会館大ホールにて、ボランティアセンターが松山市社会福祉協議会会長より表彰されました。

継続的な松山市社会福祉協議会との連携、まごころ銀行協力に対する表彰でした。

当日も受付・車椅子介助ボランティア兼受賞のために5名の学生が参加しました。



「日常を見る目」

人間健康福祉学部 大久保 元正

平成29年4月から聖カタリナ大学に参りました、大久保元正と申します。専門は社会学です。皆様、これからどうぞよろしくお願いいたします。少し遠回りをするようですが、自分の好みのものと結びつけつつ、自分が最近考えていることを書いてみたいと思います。

私は昔から、マンガを読むことが好きでした。少年マンガや青年マンガはもちろんのこと、劇画や少女マンガに至るまで、とにかく多くのマンガ作品に接してきましたが、その中でも、私にとって特に強く印象づけられている諸作品を描かれたマンガ家が2人います。

1人は川原泉氏です。この作家のマンガは、まず作中の言葉遣いや台詞回しが独特で、「これ、どこかで使えないかな?」と常に考えていた記憶があります。また、登場人物の設定がなかなか複雑であり、(たいてい)女子高校生の主人公がすでに親を亡くしていたり、学校や社会の「普通」に馴染めずにいたりするのですが、それでもその主人公がたくましく、芯を曲げず、それでいて絶妙な力の抜け具合で生きているのです。おそらくは作家自身のそれが反映されている、この何とも言えない脱力感の見せ方に私は強く惹かれました。

もう1人は西原理恵子氏です。この作家のマンガは、絵柄から言葉遣いから、何もかもが良い意味で破壊的です。作品の中に盛り込まれているテーマもハードで、貧困、借金、離婚、差別、暴力、犯罪、アルコール中毒、DV、死、などなど、一見して「重い」話が山ほど出てきます(そうでないマンガもたくさんありますが)。しかしこの作家に言わせれば、そういった「重い」話は本人の周囲で(時には本人が巻き込まれるか、あるいは本人が引き起こしながら)日常的に起きていたことで、特別目新しいことでもなかったとのことです。そしてそれすべてを、作家本人の圧倒的なパワーと、他に類を見ない投げやりさを含んだギャグで覆い尽くしていくのです。「人生、分かんなくなったら、炭水化物食って寝ちゃえ。」けだし名言だと思いませんか?

川原氏は主にフィクションを、西原氏は主にノンフィクションを描くことが多いという違いはありますが、この2人のマンガ家およびその諸作品に共通しているのは、作家本人にとってはごく当たり前の事柄に対する、暖かくも冷静な視線だと思われます。「冷静な」ということの意味は、単にそれらの事柄を我慢したりやり過ごしたりして終わらせるのではなく、それらを自分の中に取り入れて、自分なりの解釈をほ

どこしてネタにして、そしてエンターテインメントに昇華させて人に提供する力があるということです。だからこそ、この2人の諸作品は多くの読者の心を惹きつけるのではないかと思うのです。

さて、自分の好きなマンガ(家)の魅力について熱く語ってしまいましたが、その魅力が、最近自分が考えていることと、妙に結びついている気がするのです。私はこれまで、現代社会論や社会理論といった、社会全体をひとくくりにしてその大きな特徴や仕組みを語ろうとする、概略性の高い学問世界の中で生きてきました。それはそれで面白かったですし、学ぶことも多かったです、学問として重要な分野であることは間違いないと思っています。ただ、そこで学んだことの中には、自分の日常的な体験を、自分のリアルな感覚の中に「なるほど、そういうことか」と実感を込めて意味づけ直すためにどう応用すれば良いのか、必ずしも明確ではないことも含まれていました。もちろんこのことは、きちんと存在している応用可能性を私が理解できていないだけの話で、学問分野の特性の責任ではありません。ただ、どうも今の私には、私が好きな2人のマンガ家のような、人々の日常的な現実を押さえつつ、そこから何かを紡ぎ出す能力がまったくないのではないかと不安に思うのです。少なくとも、そのような目や力を磨く努力を自分はこれまでしてきただろうかということに、自戒を込めた後悔のようなものを最近いくらか覚えるのです。

学問や研究の世界で、人々の日常的現実に直接的に触れ、そして新しい気づきをもたらす営みと言えばフィールドワークでしょう。社会学の世界にも、読者に様々な気づきをもたらしてくれる魅力的なエスノグラフィーやモノグラフは数多くあります。もちろんそれらはエンターテインメントを目的としたものではありませんが、これまで自分が当たり前だと思っていた生活の風景を違ったものに見せてくれる、つまり一種の「驚き」を読者に提供してくれるという点では、エンターテインメント作品と似ているのではないかと思います。私はフィールドワークの経験に乏しく、年齢的に遅きに失した感もありますし、自分にできないことを遠くから眺めているからこそ楽しかったのかかもしれませんか、いつかそのような「驚き」をどこかの誰かに提供できるように、ここ愛媛の地で、少しづつでも「40の手習い」を始めようかと考えています(実際はもう41歳ですが…)



人間健康福祉学部 青木 謙介ゼミ

ゼミのテーマを教えてください。

スポーツ医学、トレーニング学、陸上競技、野外教育学など幅広い分野において、学生自らが実践して課題を見つけています。

3年次前期にはテープング技術習得や骨密度測定、最大酸素摂取量測定、水辺活動における救助方法などを行いました。ちなみに足関節のテープングは全員が3分以内で巻けるようになりました。3年次後期からはこれまで測定したデータを使用して、4年次に作成するゼミ論の書き方などを中心に行います。



青木謙介ゼミは こんなゼミ

私たち青木ゼミは、男子7名、女子4名そしてとっても優しい(?)青木先生の計12名で楽しく活動しています。毎週の授業やアウトドア実習などは、学生が主体となって考えています。スキーや沖縄での海洋研究、富士山登頂など、今しかできないことを経験でき、最高の仲間と最高の思い出をつくることができました。

ゼミの特徴＆スタイルを教えてください。

「挑戦！！」をゼミの基本スタイルにしています。私が専門としている分野に野外教育学があります。海や山、夏や冬、場所や季節によって自然是大きく変わります。そんな自然環境の中にはたくさんの挑戦や大きな学びがあります。青木ゼミでは冬のスキー実習と夏のアウトドア実習は必修です。今年の冬は鳥取県の大山へスキー実習、夏は沖縄県渡嘉敷島へスノーケリングやカヤック実習を行いました。学期中に行う救助方法やテープинг技術などは、野外活動中に起こる事故に対応できるようにしており、大学内での学びと実習がうまくリンクするように設定しています。

学生は大自然の中で多くの貴重な経験をして、ひと回りもふた回りも大きくなったと思います。このゼミは野外教育分野だけではありませんが、多くの貴重な経験を通じて、学びに変えてもらっていないと思っています。



・藤原 優歩(健康スポーツ学科3年)

ご寄付のお願い【教育振興募金のご案内】

聖カタリナ学園では聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部の教育事業を永続的に発展させるため、また、教育環境の維持、充実を図るための支援として、皆様からの募金のご支援を受け付けております。

趣旨をご理解いただき、ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

【お問い合わせ・お申し込み先】

学校法人聖カタリナ学園 法人本部事務局
〒799-2496 愛媛県松山市北条660番地
TEL 089-993-1300 / FAX 089-992-5616

就職課長 鈴木 勝

「働く意味って何だろう？」生きていくために必死で働いていた時代なら考えもしなかった疑問かもしません。しかし、日本経済が豊かになり職業や生き方も自由に選択できる時代には、何をしたらいいのか、どこに就職したら良いのかわからない学生も多く、働くことについての根本的な疑問を解決しなければなりません。

働くことは、その対価としてお金をもらうという意味がありますが、「働くこと＝お金」だけでしょうか。人は働いた結果であるお金より「働き方」そのものに充実感を感じているものです。つまり、働くことは「お金+何か」であり、働く意味を考える人はその「何か」を探す必要があります。

自分がやりたいこと、好きなことを仕事にできたら、幸せかもしれません。しかしながら現実的には、好きな仕事とあってもその中には好きではない仕事も含まれています。

人間は社会的な動物であり、社会に関わるために働いています。つまり、本能的には楽な人生を生きたいというより「充実した人生」を送りたいと願っているものです。それでは、充実感とは「何かを達成したり」「人の役に立ったり、喜ばれたり」したときに感じるものです。人間は「人に愛されること」「人に褒められること」「人の役に立つこと」「人から必要とされること」を働くことによって学び、その幸せを得ることができる訳です。

したがって、「働く意味」とは、お金を稼ぐ手段であると同時に、働くことで味わうことが出来る「人生の達成感」であります。そのためにも、やりたいことを見つけるためにはまずは何かをやってみること、体験すること。自分の手で作り出した仕事は楽しいに決まっています。

基本的に就職課は、企業や施設と密接な関係を築き、学生にとって気軽に相談できる環境をつくり、魅力的な存在でなければいけません。



就職課で多数の企業や施設からの求人票が閲覧できますが、求人票には、事業内容のほか、賃金制度や社会保障、雇用形態などといった労働条件を知る重要な情報が書かれています。また、就職課は就職ガイダンスなど就活に役立つイベントを数多く開催し、就活ナビなどネット情報を超える生きた情報や、人と人が触れ合う場として血の通った最新情報があるなど、知らないともったいないくらいに、すごい機能を持っています。



さらに、就職課には有能な人材を配しております。キャリアコンサルタントの有資格者や、ビジネス経験の豊富な民間企業から来た就職課長が就職支援を統括しているなど、どんな相談に対しても学生の立場に立って、有益なアドバイスを与えることができます。

就職課職員も専門的知識を有しております、実際の人事採用の視点から、履歴書・エントリーシートの点検や模擬面接など丁寧な指導をするなど、情熱ある対応をしておりますので、学生にとって本当に頼れる存在です。

今後、大学の出口戦略として就職課の役割は重要であり、地元自治体や企業・施設と連携して雇用創出に取り組むなど、産官学民と連携して地域で活躍できる人材を育成し、地方大学の活路を見出すべきであり、地域連携はイベント参加だけでなく、地域の安定した雇用対策に向けての連携として積極的に取り組むべき状況にあります。

また、現実的に学生の基礎学力そのものが全体的に低下しているため、大学1年次から読解力、文書作成能力、問題解決力などを育む授業を実施し、高校までに学んできたことの復習など基礎学力アップも大学の仕事であります。

さらに学生の進路相談については学業や生活面だけでなく就職面も、就職課と連携を取りつつ学生に最も近い存在であるゼミ教授に任せることが効率的であり、就業力を育成する大学として真剣に取り組むことが保護者の期待に応え地域貢献につながります。

最後に、学生の皆さんに就職課の活用法を7つ紹介します。

- ① 就職ガイダンスやイベントで視野を広げましょう。
- ② 個別相談など相談の機会を生かしましょう。
- ③ 大学紹介のインターンシップで社会を知りましょう。
- ④ 就職課に来ている求人票をチェックしましょう。
- ⑤ 企業合同説明会に積極的に参加しましょう。
- ⑥ 先輩たちの就活体験記を読んで就活を身近に知りましょう。
- ⑦ 就職課の支援プログラムを見逃さずに活用しましょう。

今後も就職課では学生本人の納得のいく就職活動を支援してまいります。

就活の強い味方である就職課へ訪問しましょう！

enjoy 就活！

クラブ紹介

軟式野球部



軟式野球部は、毎週月・水・金曜日の放課後、授業が終わる次第グラウンドに集まり、ランニングやキャッチボール、ノックといった基礎的な練習から始めています。平日は3~4時間程度の練習時間ですが、試合を想定した実戦形式の練習も取り入れるなど、日々チーム力の強化に励んでいます。また、練習後には大学内のトレーニング施設「サルーテ」で各自が体を鍛えるなど自主練習も怠りません。

平成29年度の春季リーグ戦では、徳島大学との決勝戦に3対2で勝利し、初の春季リーグ戦優勝と全日本選手権への出場権（四国地区代表）を勝ち取りました。8月に長野県で開催された第40回全日本大学軟式野球選手権大会では、日本体育大学（東都代表）に1対6で敗れ、悔しい初戦敗退となりましたが、これまでの練習の成果を実感するとともに新たな課題も発見することができました。さらに秋季リーグ戦でも優勝を収め、昨秋のリーグ戦から続く連続優勝記録を「3」に伸ばし、2年連続で西日本選手権大会への出場権も勝ち取りました。

軟式野球部の良さは、一人一人の自主練習に取り組む姿勢とチームワークだと思います！チームみんながとても仲が良いため、先輩後輩関係なく練習中や試合中に声を掛け合っています。そのため、少し苦しい場面でも仲間たちの声で乗り越えることが出来ています。仲間や多くの方々に支えられて野球が出来ていることに感謝し、今後も活動していきたいと思います。

部長 健康スポーツ学科3年 曽我 優貴

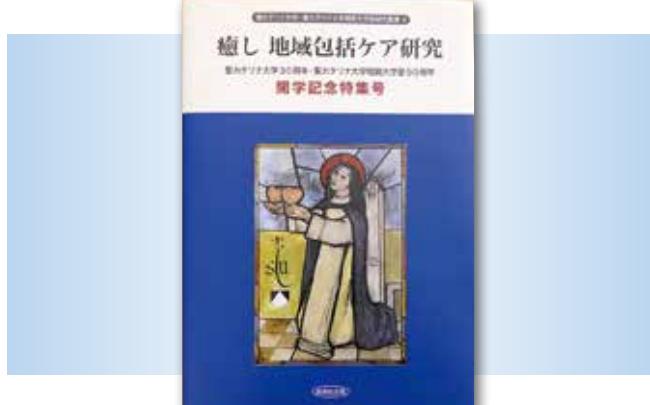


教員著書紹介

[聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部研究叢書4]
癒し 地域包括ケア研究

聖カタリナ大学30周年・聖カタリナ大学短期大学部50周年
開学記念特集号

恒吉 和徳（聖カタリナ大学教授）他 13名：創風社出版 2017年



本書は聖カタリナ大学開学30周年・聖カタリナ大学短期大学部開学50周年を記念して発刊した『記念論文集』です。本学はこれまで健康福祉分野における優秀な人材育成、地域社会で活躍できる人材育成に取り組んできました。急速な勢いで進行する超高齢社会においては、特に地域包括ケアシステムの構築が進められており、今後益々健康・看護・福祉・保育・地域社会が一体となった地域づくりが必要になってきます。ただし、そこには物質的豊かさに加えて心の豊かさとしての環境（癒し）づくりが必要不可欠であり、この環境をいかに再構築していくかが喫緊の課題であるとの認識から、「癒し 地域包括ケア研究」というタイトルから編んだのが本書になります。

内容は「いやし 隣人を大切にする心」「こころ豊かな地域支援活動—愛媛の実践を中心に—」「看護教育のあり方—一本学が目指すもの—」という構成になっており、健康・福祉・看護・保育の領域を専門とする本学教員等が執筆しています。特に愛媛県内における地域支援の実践的取り組みや今後の課題等について考察した内容が多いことから、本書が愛媛県における地域再編の一助になればと願っています。



学校法人 聖カタリナ学園

聖カタリナ大学

カタリナひろば vol.30 No.1

編集・発行
広報委員会

〒799-2496 愛媛県松山市北条660番地
TEL (089) 993-0702 (代)
kouhou@catherine.ac.jp